

森の植物や鳥・虫などの動物を紹介します

1 カタバミ (カタバミ科)

ハート形の葉と黄色い花をつけるおなじみの畑雑草です。園内のいたるところに生えている多年草で、葉は3小葉、ひとつひとつはハート形をしています。葉の縁には毛がありますが、葉身(葉そのもの)は通常無毛です。葉色も、通常緑色です。

また、茎は地を這うように伸びていき、節々から発根し、頑丈に地面とくっついていきます。そのため、むしってもむしっても除去しきれないやっかいな雑草です。

花は5弁花で黄色です。花後は先がとがった円柱形の果実を上向きにつけ、軽く触っただけで弾けます。



2 コニシキソウ (トウダイグサ科)



北アメリカ原産で、道ばたや畑地、庭の隅などにごく普通に見られる小型の帰化植物で、園内にもたくさん生えています。

茎は淡紅色で地面を這うように広がりますが、「さび病」と呼ばれる病気に侵されると、茎が直立する傾向があります。葉は小さな長楕円形で、中心に紫色の斑紋があります。

茎を切ると白い乳汁が出てきます。これは、子供の間では、「トンボのミルク」と呼ばれていますが、特にトンボがこの汁を好むわけではありません。



3 オオニシキソウ (トウダイグサ科)

これも北アメリカ原産で、園内のいたるところに普通にはえる1年草です。若い段階で茎が斜上し、アーチ状になります。その後どんどん茎が立ち上がり、多数分岐して、大きいものでは60cmに達することもあります。

夏から秋にかけて、茎の先に杯状花序をつけます。花序の付属体が発達し、白い花弁が4枚あるかに見えます。



4 ツユクサ ((ツユクサ科)

道ばたや草地など、いたるところにごく普通に生える1年草で、園内の湿地や水辺にも生えています。先がとがる広披針形の葉をつけながら、30~50cm程度になります。本種は茎の節から簡単に発根する性質を持っています。

夏から秋にかけて貝殻状の苞葉につつまれ、青い花が咲きます。花弁は3枚で、内2枚は大きく目立ちますが、もう1枚はとても小さいです。

花の色や形、葉の様子などに変化が激しく、様々な品種が報告されています。

5 ミゾソバ (タデ科イヌタデ属)

園内の水辺などにはえている1年草です。葉の形は独特で、まるで牛の顔のようにも見えることから、ウシノヒタイという別名もあります。通常全体緑色ですが、中には葉の中心付近に山形の黒い斑紋が入ることもあります。夏の終わりから秋にかけて、小さな花が十数個程度かたまっつきます。花は白で、花弁の上部が紅色に染まり、かわいらしいイメージです。



6 オオバコ (オオバコ科)

本種は踏みつけにとっても強い多年草で、道ばたのアスファルトのすき間や、砂利道など、人や車で踏み固められたような場所で生きていく競争戦略をとっています。

葉は卵形で、しわがあり、丈夫な平行脈が何本か走っています。そして茎を伸ばさず、地面にべったりへばり

つくように葉を広げていきます。春から秋にかけて、10cm程の硬い花茎を伸ばし、穂状に小さな花をつけます。この花茎は硬いけれどもしなやかに曲り、足で踏んだ程度では折れません。この花茎を引っかけて、ちぎれた方が播けという「オオバコ相撲」は、有名な野原の遊びです。

7 ヤブガラシ (ヤブカラシ) (ブドウ科ヤブガラシ属)

道ばたや畑地、やぶなど、どこにでも普通に生えるつる性の多年草で、園内でも見られます。手入れの悪い貧乏くさいところを覆いつくすのでビンボウカズラ (貧乏蔓) とも呼ばれます。

春の芽ぶきは赤みが強く、結構目立ちます。その後、目に見えるほどのスピードでつるが生長していきます。葉は通常5小葉で、葉が少しずれてつく「鳥足状複葉」と呼ばれる独特のつき方をします。

夏から秋にかけては、ひらべったい花序をつけます。花は4弁花で黄緑色、中心付近の花盤と呼ばれる部分が橙色をしています。花弁は午前中で脱落してしまい、花盤だけが残ります。本種の花にはアシナガバチやスズメバチの類が吸蜜に来るので花期の観察は注意が必要です。



8 モンキチョウ (紋黄蝶) (チョウ目アゲハチョウ上科シロチョウ科) とスターチス (イソマツ科)



モンキチョウは園内いたるところで見かけます。

前翅長は23~26mmで5月から9月までに飛翔し、年に2回発生します。幼虫は、ムラサキウマゴヤシ属、クローバーなどのようなさまざまなマメ科の植物を食草とします。チョウが蜜を吸っている花は、スターチス (別名: 浜花匙) です。どこからかタネが飛んできたのでしょうか。里の森ゾーンのあちこちに咲いていました。高さ60~90cmになり、花茎は分岐して散房状に偏側性の集散花序をつけ、全体で複合花序を形成します。

